

とうじやしき じょうやとう

唐治屋敷の常夜燈

(緒川新田)

おがわしんでん とうじやしき おおむかし とうしすなわ
「緒川新田の唐治屋敷は、大昔、陶師即ち、

焼き物師たちが住んでいたところです。その後、

田畑となり、江戸時代の中ごろには、緒川から

人が移り住んで新しい集落を作り始め、さら

に野山を切り開いて田畑を広げていきました。

そして、明治の始めころには、三十軒もの家が

建っていました。

「この地区にも家がふえてきたが、夜になって、

常夜燈がないのは、さみしいのう。」

「そりやあ、常夜燈があったらよかろうに。」

「だか、今、新しい常夜燈を作ると、ぎょうさ

んの金がいるのでう。」

「いったい、どのくらいかかるもんだい。」

「さあ、のう。」

唐治屋敷に住む人たちの間に、こんな話が

交わされるようになったのは、明治維新の変動

もおさまり、ようやく世の中が落ちつきをとり

もどしてきたころです。

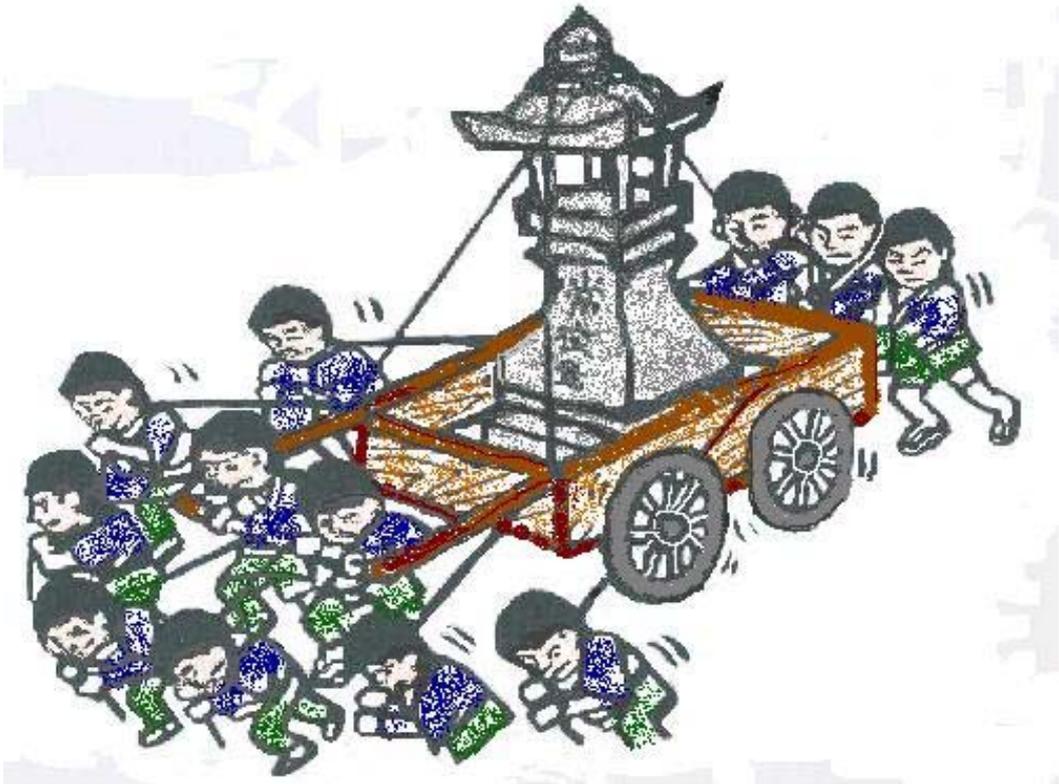
ちようどそのころ、刈谷へ用足しに行ってきた

た村人の一人が、逢妻川の市原の入江にあつて、

みなと でき ふね
港に出入りする船のめじるしとなっていた常
やとう いりえ う た
夜燈が、入江の埋め立てでいらなくなっている
はなし き
という話を聞いてきました。持ち主は、もと、
かりやはんし いのやすうえもん ひと ゆず
刈谷藩士だった井野安右衛門という人で、譲つ
てもよいといっていることもわかりました。

ねが はなし
「それは、願ってもない話だ。さっそく譲つて
もらおうじゃないか。」

はなし き
話はすぐに決まって、当時としては格安の二
えん わ
十五円で分けてもらうことになりました。そし
とうじやしき ひと そうで おも いし じょうやとう
て、唐治屋敷の人たちが総出で、重い石の常夜燈
うんぼん あ めいじ ねん あき りっぱ さいけん
の運搬に当たり、明治二十年の秋、立派に再建さ
れました。





▲ 唐治屋敷の常夜燈
とうじやしき じょうやとう

それから、この常夜燈は、村内安全のシンボルとして、夜の村を明るく照らしてくれるようになりました。

今もその常夜燈は、緒川新田の名鉄の踏み切りから東へ二百メートルほど行ったところに

建っています。船の神様である四国の「金毘羅」の文字が刻まれているのは、刈谷にあったとき、航海安全を祈って建てられたものだからです。